

研究タイトル：

ゲーテにおける枠物語



氏名：	木田 / 綾子	E-mail：	kida@gen.niihama-nct.ac.jp
職名：	准教授	学位：	博士(文学)
所属学会・協会：	日本独文学会, 西日本支部学会, ゲーテ自然科学の会		
キーワード：	ドイツ文学, ゲーテ, 枠物語, ドイツ語		
技術相談 提供可能技術：	・ドイツ語翻訳		

研究内容：ゲーテにおける枠物語—メールヒェン, ノヴェレ, ロマーン

本研究は、ゲーテが『ドイツ避難民の談話』(1795)と『親和力』(1809)と晩年の大作『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1829)において枠物語という古典的な文学形式を巧みに用いながら、「メールヒェン」「ノヴェレ」「ロマーン」といった新たな文学ジャンルを展開させることで、物語するという人間の根源的営為の核心に迫って行った経緯を明らかにする。

枠物語は古くから西洋文学において好んで用いられてきた古典的な文学形式である。代表的な作品として、ボッカチオの『デカメロン』(1348-1353)、チョーサーの『カンタベリー物語』(1387-1400)などが挙げられよう。この古典的な文学形式をドイツに広めたのは、複数の人物によって語られる七つの挿話を含むゲーテの『ドイツ避難民の談話』である。もっとも、ゲーテのいずれのロマーンも何らかの形で挿話を含んでいるにもかかわらず、『ドイツ避難民の談話』以外の作品は枠物語という観点から考察されることは皆無に等しかった。しかしながら、伝統的な枠物語によく見られる設定、すなわち、夜も更けるころ気晴らしや癒しのために物語が語られるという設定は、ゲーテの他のロマーンにも認められるのである。ゲーテは古典的な枠物語の形式を巧みに利用しながら、当時はまだ発展途上にあった文学ジャンルを新たに展開させたのであり、別言すると、18世紀より台頭してきたロマーンという新しい文学形式に「物語の中の物語」であるメールヒェンやノヴェレを組み込むことによって、新たな表現可能性を探ろうとしたのであった。

『ドイツ避難民の談話』と『親和力』と『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』は、枠物語という観点からすると、非常に関連性が高い。『遍歴時代』は『談話』と『修業時代』の続編の構想が合わさって完成した作品であるし、『親和力』はもともと『遍歴時代』の挿話の一つとして構想されていたからである。事実、『ドイツ避難民の談話』中の「メールヒェン」、『親和力』中の「隣り同士の不可思議な子どもたち—ノヴェレ」、『遍歴時代』中の「新メルジューネ」は、いずれにもタイトルが付されている点と、挿話として独立性が高いにもかかわらず、作品全体と挿話とが密接な関係にある点において共通している。また、いずれの作品においても、挿話の語り手が聞き手にとって馴染みのない存在に設定されている点も看過できない。これらの作品を分析し、ゲーテにおける枠物語形式の三段階を明らかにすることが本研究の目的である。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	